

地の塩として（チャペルメッセージ③）

あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

（新約聖書・マタイ福音書 5 章 13-16 節）

【序】新年度を迎えて一月が経過しましたが、今年度は入学式もなく、また対面授業も行われない状況の中で春学期が始まり、まったく想定外の学生生活のスタートに戸惑っている人も多いかと思います。さて、関西学院大学に入学された皆さんには何よりもまず自分の大学・学部のことについて知ってほしいのですが、今回は人間福祉学部の表題聖句として定められているマタイ福音書 5 章 13 節の「あなたがたは地の塩である」という言葉を取り上げてみます。この聖書の一節は、G 号館の正面玄関の受付のところに日本語とギリシャ語との併記で彫り付けられていますので、対面授業が始まったら是非一度立ち止まって確認してください。因みに日本語の文字は、あの日野原重明先生の筆によるものですのでそのことも覚えておいていただければと思います。

【1】この「あなたがたは地の塩である」という言葉ですが、この短い一文の中に実に深い意味が込められていることに気づかされます。この言葉は、イエス・キリストが弟子たちに対して語った言葉として伝えられていますが、考えてみると「地の塩」という言い方は少し妙な表現のようにも思えてきます。「食卓の塩」とか「海水中の塩」ならわかりますが、「地の塩」といわれても、一体何のことかよくわからないというのが実際のところかもしれません。そこでまず、「地の塩」の「地」という言葉ですが、これは私たちが生きているこの大地、この世界のことを指しており、その意味は明らかであるかと思います。一方の「塩」の方ですが、これは皆さんもよくご存知のあの塩のことを意味しています。ただ、この「塩」は多様な機能をもっていることに注目したいと思います。

まず第一に、塩は食べ物を味付けする調味料としての意味をもっており、これが最も一般的な塩の使用法です。しかし、塩の機能はそれだけに留まるものではありません。実際、塩は味付けをするという機能の他に、食べ物を保存し、腐るのを防ぐ保存料、防腐剤としての役割をもっています。さらにこの塩は、古くより穢れを清めるという宗教的な意味も持っていました。日本でもいやな客が帰ったときには塩をまいて厄払いするという習慣がありましたが、まさにあの汚れを清める機能です。いずれにしても、塩はこのように、味付けをし、風味を保ち、汚れを清めるというように様々な機能をもつ貴重なものとして捉えられてきたわけです。

そして、そのように考えてくると、この「地の塩」という表現は本来、この世界においてなくてはならない貴重な役割を果たしている存在のことを指していることに気づかされます。すでに触れたように、この言葉は本来、イエスが弟子たちに対して語った言葉として伝えられていますが、その意味でもこの「あなたがたは地の塩である」という表現は、あなたがたは、まさにそのようにこの世にあって、なくてはならない貴重な存在なのだ、いやあなたがたはそのような貴重な存在となるように、この世にあって

て善き働きをなしていくべきなのだと語っているわけです。

さらに、この聖書箇所が続きの箇所にはこのようにあります。「だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味がつけられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられて人々に踏みつけられるだけである」。実際に、塩が塩気を失うというようなことは科学的に起こり得ないようですが、ここで言われていることは容易に想像がつくと思います。すなわち、あるものが持っている特性、その固有の資質を発揮することなく、本来の特質を失ってしまうとしたら、いったいそれは何の役に立つのか。あるいは、これは人に置き換えた方がわかりやすいかもしれません。その人が持っている才能、本来の力を発揮することなく無駄にしてしまうなら、それは本当にもったいないことだということです。例えば、日米のプロ野球で大活躍したイチローがもし野球と出会っていなかったらと考えると、それは本当にもったいないことだと思います。事実そのように、自分もっている資質、特質を無駄にすることなく、しっかりと発揮すべきだということがここでは言われているのです。

【2】しかし、この「地の塩」という言葉にはさらに深い意味がこめられているように思えます。何より注目してほしいのは、「地の塩」という表現がもっている極めて地味なイメージです。実際、大地の上に塩がまかれていたとしても、そのことに気づく人はいないでしょう。つまり、この「地の塩」という言葉は、単に世の中にあって貴重な働きをしているものという意味にとどまらず、その働きそのものは決して華々しくなく、地味で目立たず、誰の目にもとまらないことが前提とされているようなのです。すなわち、派手さもなく、華々しさもないけれど、しかしその働きは非常に貴重であるような存在。その存在については誰も気づかないような目立たない存在であるにも拘わらず、無くてはならない貴重な働きをなす、まさに空気のような存在のことをこの「地の塩」という言葉は言い表しているのです。

事実、必ずしも華々しく活躍する人材を育成・輩出することが私たちの学部本来の目的ではありません。もちろん、卒業生の中から有名人が出てくることによって大学の知名度をあげることができるし、それによる宣伝効果も期待できるでしょう。しかし、世の中には、その働きは目立たず、人々からまったく評価されなくても、それぞれの場で貴重な働きをなし、見えない所で社会に貢献している方々が多数おられます。そしてある意味では、派手な活躍をして人々から称賛されている人よりも、働きは地味で人から称賛されなくても、本当の意味で社会のために貢献している人の方が、考えようによってはずっと価値ある存在なのかもしれません。つまり、報いがなくても人のために尽くせる人というのは、報いがあるからそうする人よりもはるかに貴重な存在と言えるのではないのでしょうか。そしてそのように、たとえ人から評価されていなくても、それぞれの場で地道な努力を重ねつつ、社会のため、人のため、地味であっても良い働きをなしうる人材を生み出していくことは、いわゆる有名人を輩出していくことよりもはるかに尊いことであり、さらに言えば、非常に難しいことなのかもしれません。その意味でも、たとえ社会的に評価されなくても、他者のために仕え、地味ながらも社会のために貢献できる人材を育成することに私たちの学部の本来の使命があると考えられるのです。

【結】どうぞ皆さんも、この学部で存分に学び、多くのものを吸収して、将来、地の塩として様々な分野で善い働きをなしていくための準備をしていってください。そしてまた、私たちの学部が、本当の意味で良き働きをなしうる人材を育て、輩出していく学部としてこれからも成長を遂げていけるように、また何より他者とともに歩み、関西学院のスクールモットーであるマスタリー・フォア・サービスの精神を体現していく学部として前進していけるように心から願い求めたく思います。